

あなたにもできる大切な人を守るための防災対策

「生活防災」

災害に備えてたくさんの防災用品を用意して、あれこれ心配しても、いつどこで、どのような災害が起きるのかわかりません。確かに「備えあれば憂い無し」ですが、だからといって日常生活とかけ離れたことをやっても継続することができるのでしょうか？

たぶん多くの方が「災害発生のニュース」を見て、しばらくは防災に興味を持ち防災意識が高まるのですが、「防災意識」は本当に熱しやすく冷めやすいものです。「のど元過ぎれば熱さ忘れる」ですね。

必要なこととわかっていても、継続できなかつたり、後回しにしてしまうものです。ところが災害にみまわれると「あのときやっておけば良かった」など「後悔先に立たず」です。そこで出てくる言葉は「だれも災害が

来ることなんて教えてくれなかった」「言ってくれていたらやってたのに」いつの世も同じ言葉が繰り返されます。

確かに災害は非日常的な出来事であり、それを日々意識するのは困難です。それを日常の中で防災力を高めるために「できることから」「関心のあることから」をやるのが基本です。

京都大学防災研究所准教授の矢守克也先生が推奨する『生活防災』がそれなのでしょう。矢守先生は京都新聞のコラムでグリーンシティ防災会を取りあげ、このように語られています。

「生活防災」の基本精神は、「できることから」、あるいは、「関心のあることから」である。たとえば、「加古川グリーンシティ自主防災組織」(兵庫県加古川市)に、「町内チャンピオンマップ」という仕組みがある。これは、大規模マンションに暮らす住民が、災害時に自分が提供可能な能力・サービスを事前に登録しておくというものである。

医療や看護の技術、大型車両の運転といった防災に直結することはもちろん、それ以外にも、部屋の片づけ、買い物や子守の手助け、インターネットによる情報収集や発信など、後方支援に関する登録も大いに推奨されている。実際、被災地では、こういった種類のお手伝いがとても大切だからだ。

ここで重要なことは、登録者の多くが、ふだん本人がやっていることを登録しているという点である。

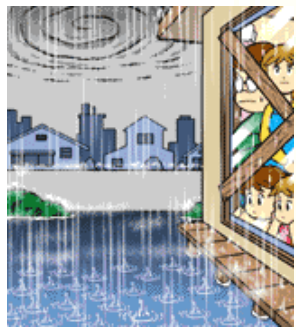
ドライバーは運転、幼い子どもをもつ保護者は子どもの世話、パソコンが趣味の人はインターネット操作というように、ふだんの得意技を生かしているだけのことである。

もっとも、「だけのこと」は、大変失礼な言い方になる。「そんなことでいいなら、自分にも防災はできる」と住民たちに思わせたところが、「町内チャンピオンマップ」のツボなのだから。防災は、消火訓練や救命救急のスキルだけで成り立っているわけではない(もちろん、それも大事だが...)。防災をふだんの生活から引きはがして、特別な活動にしてしまうから、人が寄ってこなくなる。災害のためだけに保存食品を買い込むから腐らせてしまう。ふだんから自分が好んで食べるもの(ただしあまり腐りやすい食品は不可)を、ちょっと余分に買ってあげればそれでいい。そして、先に買ったものから食べ、食べたら、ふだんの買い物を通して補充する。

防災を日常生活の延長線上に位置づけ、ふだんの生活の中に組み入れることができれば、それはきっと長続きする。長続きすれば、忘れたところに災害に不意打ちされる気遣いも減ろうというものである。2008/7/18付

無理をせず、ほんの少しだけ「防災意識」を日常に組み込むだけで継続できるのです。

私たちグリーンシティでは、防災を普段の生活から引き離して特別な活動にしてしまうことなく、防災を日常生活の延長線上に位置づけ、普段の生活の中に「楽しさ」を組み入れることで継続を可能にしています。「楽しくなければ防災の輪は広がらない」「楽しく防災活動をやろう」をキーワードに、今後も防災活動を行います。まずは自分のため、家族のため、そしてみんなのために、あなたも生活防災に参加しましょう。



「町内チャンピオンマップ」にご登録ください！

氏名・年齢・性別・特技を記入。例えば、「何でもやります」「お手伝いできます」でもOK！

「ひと声かけて」の登録もご遠慮なく

お年寄りの方や傷病者、障害をお持ちの方がいらっしゃるご家庭等には、少しでも早く声をかけられるように登録をお願いします。